植木屋考

木 村 三 郎*

An Essay on "Uekiya"

Saburo KIMURA

摘要：徳川時代の末期に植木屋と称する用語が定着していることに気付く。正に一種の植木屋時代が形成されていると見てさしつかえない。これは庭作りというデザイン重視から庭石や植木の如き作庭材料重点へと世相が傾斜して行ったものと思われる。換言すればその頃庭作りの専門書が刊行されて一般庶民の間にまで普及しデザイン部門がレディ・メード化してしまったと見ることも出来る。本考はその歴史的経過の究明である。

1. 発 端

明治時代初期の文献『武江年表（増補版）』（明治9年 斉藤月峯著）は、明治に入って衰退する職業の一つに植木屋（芸花園）業をあげている。これを言葉で換えて云えば明治以前には植木屋が可成りの繁昌振りを示していたということになる。当時の考証随筆の一つ『嬌遊笑覧・巻一之上』（喜多村信節著、1830）に、「近頃茶事ますますはやりて猫の額ばかりの庭にもかの青竹のふときをもみ糠などに磨きけんにんじ（建仁寺）というものわらび縄もていかめしく結びめぐらし、ずんど切とて大木を半より截たるを植え、みかげ石のきらめける石燈籠手水鉢の大きなを置き飛石とはいへど大石を地の明きたる処もなき迄敷き並べたるは見るめもうとまし。これただ人情野鄙になって価の高下をもてきたるよりかかる似つかはしからぬ事にも心つかず大かたは植木屋どもに任せてさするなり。世にはやればそれをよしとする俗人さらにおのれが見解なし、云々」と。又「古は庭作るといえば上に見えたる如く凡下のある事にあらぬ故、是を業とする植木屋などもなかりしなり。」とあるが、正しく当時の世相をよく物語っているといえる。

又、その頃の重臣松平定信（1812、隠退楽翁と号す）の著『菟裘小録』（『古事類苑』所収）にも「庭つくりとて世わたるもののするはいといたういやく松などもさまざまに枝たわめ、ときは木を丸くかず塚おほくたてたるが七五三の膳部の上をみるさまして興なし。（中略）ひろき庭はもとより地勢に従うばかりなり。わが心にたくはふる事なく池はるべき地勢ならば池をつくるべし。かまへて池をつくり田をつくらんと強ひてはかれは似あはぬ景色ぞ出来る。されども室町のころも庭といへば木などつくりたる事とみゆ。唐山の風なるべし。わがいう

は野山のまねびなればのやまにあきたるものは庭をまたのらとせむ心もあらじ。庭つくりの文など見てほどよくするにしかじかし、云々」とあり、庭作りの墮落振りの一端を厳しく批判しているともいえる。もっとも籬島軒秋里著『築山庭造傳』（1829）、『石組園生八重垣傳』（1827）などを批判したというよりも寧ろ『作庭記』の如きを既に讀んでいてその精神を代辯したものではなかろうか。上述の『嬌遊笑覧』も『作庭記』に言及するところ多く、又『作庭記』を収録した『群書類從（正）』の板行も1819年とすると定信自身の云う「庭つくりの文」とは正に『作庭記』の如き古いしきたりを意識したと見ても強ち無理ではない。即ち徳川時代も後期となればなるほど穏かな茶人風文人調が支配的となり植木屋の活躍の場は次第に拡大し、植木屋の繁昌振りが裏付けられてくことも十分窺える。江戸佐原菊塙の『百花園』（1804）や楽翁著『花月草紙』（1803）の中の庭園観もこの好例といえる。

以下改めて、植木屋抬頭の経過をいささか体系的に言及することにする。

2. 本 論

(1) 江戸の場合

もともと植（字恵）木という用語の使用は甚だ古く『古事記』・『万葉集』の中に既に散見する。そして隣国中国では種樹（『史記』『作庭記』参照）という用字がこれに当る。ところが植木屋という職業名は甚だ新しく徳川中後期に主として江戸文化を中心にして漸く登場する。試みに斉藤月峯の『武江年表』（1850）を見ると、先づ「正徳（1711—1716）年間染井植木屋伊兵衛霧島踰躍を多く育つ」、「享保（1716—1736）年間染井植木屋伊兵

*名誉会員

衛百種の楓を養ふ」，又「寛政四（1792）年牛込神楽坂通り西側には一部植木屋石屋あり，云々」，更に「文化九（1812）年巢鴨染井の植木屋に菊の花を以て人物鳥獸何れとなく色々形造つて諸人に見せる。江戸中の貴賤日毎に群集す」などとある。正しく植木屋が江戸市内に広がってゆく姿が示されている。もっとも月峯の『武江年表』は徳川末期の板行であるから暫らく措くとして，ところで江戸に植木屋なる用語が見られる古い示例としては例えば『江戸雀』（1677）の中に「兩國橋を武蔵と下総の國境の川にかけさせらるとて兩國の橋とは名付け給ふと世にさす。（中略）余景限りなき所なり。さて此橋を渡り左右に道有りすぐ道は廻向院両がはに植木や一町有り，云々」とあるのはその先例の一つといえる。そのほか，

①『百姓伝記（1682）』に「（杉を植る事）杉は実植よし。さし木は大木になりて木のうちにすたつなり。寒國の大木なる実を用ひよ。今，江戸の植木屋日光杉の実を種に用ひるとなり，云々」

②『江戸鹿子（1687）』に「植木屋，下谷池のはた，京橋長崎町広小路，神明前三島町，駒込め井，四谷伝馬町，其外方々に有りといへども不計也」

③『江戸名勝志（1733）』に「巢鴨の北に花木を作って売者多し。植木屋伊兵衛と云者尤も大家也。つつじ，さつき甚多し」

④同時代の『續江戸砂子（1735）』にも「躑躅。染井伊藤伊兵衛家産。元祖より五代江府一番の植木屋也，唐のやまとの本草を貯ふ。千草万花おほきが中につつじ霧嶋幾億株の限りなく地に錦を布き空は毎花に五色の雲を見せたり。霧嶋は薩摩國霧島山の産木なれば此名あり。正保年中（1644—1648）薩州より大阪へ一本来る。取木にわけて大阪より五本京都に登る。（中略）明暦二（1656）年武江染井に下す，云々」と詳しく述べている。

⑤『四時遊観録（1776）』には四時遊観の場として植木屋園中の花卉が対象となってくることが窺える。即ち「（夏の部）躑躅霧島染井植木屋伊兵衛園中（中略）江都第一の植木屋千花万花庵に倭（ママ）に鉢植もの其の数を知らず是につづくもの千駄木又は本所也。（冬の部）菊巢鴨を当時第一とす。尤も植木屋園中也。所は加賀守殿中屋敷の前すがも通り植木屋八五郎，いなり小路植木屋佐太郎，五軒町（うへ木・鉢もの）植木屋市左衛門，すりばち山植木屋佐兵衛すべて六軒。道のり十余町也」などはその示例である。

⑥そして『増補江戸年中行事（1803）』は「（四月）きりしまつつじ。染井植木屋立夏より三日目よし。（九月）菊。目黒，青山，四ッ谷，巢鴨，本所，駒込すべて植木屋の園中などに多し。立冬より五～六日見頃よし」と，場所と見頃さへも記述するようになっていく。

⑦又『江戸名所花暦（1827）』を見ると「（桜草）巢造園雑誌 50（5），1987

鴨の辺植木屋。（躑躅・きりしま・さつき）染井植木屋。

（菊）巢鴨植木屋所々にあり雑司谷植木屋いふも更なり。（水仙）押上植木屋此地に限らず染井，三崎，巢鴨，四谷，目黒辺処々につくる」などと対象内容が一層多様化の度を加えてくる。なお『武江年表』の「（1818—1830頃）にも千駄木の植木屋勇藏盆種の松を造ること巧みなり」とあり盆栽という技術も定着してくることが判る。そして『武江遊観志略（1859）』では二月（桜草），三月（躑躅霧島），四月（牡丹），五月（石竹撫子），六月（牽牛花），九月（菊），十月（紅楓），十二月（室咲梅・福寿草）の如く一層内容の富んだ案内書も出廻り夫々に専門化した植木屋の園中が示されるようになる。正に江戸の植木屋の庭さきが江戸住民の格好な遊楽地帯となって行くことは明白である。

以上を江戸風俗研究家三田村鳶魚（昭27没）はその名著『江戸年中行事』（昭2）の中で次のように解明している。即ち「四季おりおりの郊外の遊観四里四方という江戸御府内，その外周りの御鷹狩場五里四方を越えて遊観圏はほとんど十里四方にも拡大している。それを足に任せて見て廻るのだ。この行楽は人家が稠密になればなるほど江戸住民には愉快が加はる。年一年と行楽に耽けるようになるのもまことに無理はない。そのうち風景を愛し野趣を好む好尚を誘発する。やや極端な例ではあるが，先行刊行された『江戸叢書』に収められた『十方庵遊歴雑記』のごとき文化九（1812）年の夏から文政十二（1829）年の秋まで前後十八年間主として近郊の風物を探し暮し五編十五冊の紀行を遺した一向坊さんもあった。こういう人はこの仲間であった数人のほかにあまり多くあったとは思われぬけれども江戸の民衆が郊外に行楽を喜こんだことは疑いもない。弘化四（1847）年には戯作者松亭金水の『江都近郊名勝一覧』が発売されている。この本が俳家の手から出ずに戯作者の筆になっていることで郊外行楽者がどの階級まで押し上げられたかが窺える（以下詳細略）」と。

そして最近になってこの方面への研究が再燃化した感がある。例えば品田穰著『都市の自然史』（昭49），川添登著『東京の原風景』（昭54）などが出版されて一般に身近な問題となっているし，一方造園の分野からも相関芳郎著『東京のさくら名所今昔』（東京都公園協会編東京公園文庫8，昭56）とか小野佐子稿「江戸郊外遊覧地」（『造園雑誌』第46巻第4号，昭58）などが新しい。その中でもまた，植木屋に言及した箇所も散見されるが，江戸末葉の著名な案内書の一つ『江戸繁昌記』（1832—1836，寺門静軒著）は当時の植木屋の実情を既に詳しく記述している。本文は漢文調（例：『東洋文庫』本参照）であるが和文体（例：『教育社』本参照）と対比して見ると次の通りである。即ち「（初篇）江戸のりびとは縁日（賽日）が好きで風習となっていたことを証明するもの

である。縁日は夏の夜が一番盛んである。どの寺の門前街にも商人が争って露店を開く。(中略)それらの店(屋台店)のそばに植木屋(囊駝師)が並ぶ。いろいろな種類のはち植え(盆卉)をたなの上につらねにぎやかな花やしずかな草は変わったすがたを競う。枝の曲がったもの、すんなりしたもの、葉に斑(ふ)のあるものやすじのあるものなどがある。細い葉のせきしようにはそばに石を置き、すかし(穿眼)のあるのきしのぶは縄でつって垂らす。あるものには着せ綿を花にかぶせ、あるものにはあしの枯れ枝を立てて枝のささえとする。さぼてんにひなげしを配し、そてつはさぼてんをまじえる。百両(たちばな)・おもと(万年青)・千両・翠蘭などそれぞれ趣きがある。大夫の位を贈られたという松、君子といわれる竹、その中に雑木も並び、静かに林をつくっている、云々」とか「(第二篇)寛政年間(1789-1801)に世間でたいへんたちばなを愛し一寸の茎でも千金もして百両金どころではなかった。現在はおもとを愛することが都下すべてに行われている。去年紀州の人がひとつの変わった茎をたずさえてきたがその大きさは箸くらいで上部が半分白い。はじめこれを十両で売ったが数日たためうちにこれを七十両で転売した。やがて百五十両で買おうという人が現われたがその人は許さずある大名に献上して三百両を得たという。考えてみるとそもそも繁昌の中の植木屋(囊駝)が太平の世の大名かでなければどうしてこんな値段で売ったり買ったりすることができようか、云々」ともあり、当時の植木屋の羽振りのよさがまざまざと浮んでくる。『江戸市中取締類集』(「古事類苑」所収)には天保十三(1842)年に「町中並近在町並屋敷之内水茶屋料理茶屋植木屋等家作華美又手広い家作等致し候向も有之、云々」とあり、取調べが行なわれている。

このような環境の中で、来日(1860)したイギリスの園芸家ロバート・フォーチュンはその著「Yedo and Peking, 1863; 三宅馨訳 昭44」の中で次のように報告している。「日本の園芸家は菊作りの技術にかけてはわれわれよりも大分うわ手で不思議に大輪の花を咲かせる。しかしその世話は大変なもので良質の土壌とそして一本の茎にわずかに一輪か二輪の花を咲かせることに成功している」とか「われわれは何軒も茶屋や花樹園を訪ねた。そしてその設備や企画から考えて春や夏のシーズン中遊楽や保養を楽しみにやって来る無数の江戸人に愛顧されているに違いない」とか「日本の住民のはっきりした特徴は身分の高下を問はず花好きなことである。良家らしい構えのどこの家も一様に裏庭に花壇を作って小規模ながら清楚に整っている。その花作りは家族的な楽しさと幸せのために大変役立っている」と。更に「日本の国民性のいちじるしい特色は下層階級でもみな生来の花好きであるということで、気晴らしにしじゅう好きな植物

を少し育てて無上の楽しみにしている。もしも花を愛する国民性が人間の文化生活の高さを証明するものとすれば日本の低い階層の人達とはイギリスの同じ階級の人達に較らべてずっと優って見える」とも述べ、「江戸の身分のある人々はすべて高度の文明人のように花を愛好するので花の需要は極めて大きい。そこで江戸の東北の郊外に当る団子坂・王子・染井の各所には広大な植木屋がいる。私が江戸に来た主要な目的の一つはこれらの場所を調査することにあつたので時を移さず訪ねることにした」、即ち「交互に樹々や庭、恰好よく刈込んだ生垣がつづいて公園のような景色に來たとき随行の役人が染井村に着いたと報じた。そこの村全体が多くの苗樹園で網羅され、それらを連絡する一直線の道が一哩以上もつづいている。私は世界のどこへ行ってもこんなに大規模に売物の植物を栽培しているのを見たことがない。植木屋は夫々3~4エーカー(註:一エーカー当り約4000㎡)の土地を占め鉢植えや露地植えのいずれも数千の植物がよく管理されており、どの植木屋も大同小異なのでその一つを記述すれば全体のたぐみな趣向も判る筈である。(詳細省略)」とも述べ、園芸家フォーチュンだけにその観察も甚だ緻密であり大いに参考とするに値する。

以上の如き江戸における園芸ブームの様子は当時の園芸出版物の動静からも大いに窺うことが出来る。例えば『花壇地錦抄』(1695)、『草花絵前集』(1699)、『増補地錦抄』(1710)、『広益地錦抄』(1719)、『地錦抄附録』(1733)のほか『花壇綱目』(1681)、『花譜』(1698)、『花叢』(1763)、『草木貴品家雅見』(1827)、『草木錦葉集』(1829)、『花鏡』(1845)があり、更に『百椿集』(1630)を筆頭とする箇々の花卉類の解説書まで拾いあげられれば夥しい数に登るにちがいない(塚本洋太郎著『園芸の時代(昭53)』等参照)。更に中國書『秘伝花鏡』(陳扶揺著1688)の如きも輸入されていることが知られているから、その研究の巾の広さも十分窺えるといえる。その間にあって植木屋業の繁昌振りも十分可能であつたにちがいない。

しからば先進地域としての関西方面の実情がどうであつたかを次に追究して見たい。

(2) 京・難波の場合

筆者の管見の範囲では関西方面における植木屋という呼称は江戸の場合よりも却って遅れて使用されているように思われる。例えば二代目団十郎(市川栢延)日記『老のたのしみ』(岩波本「日本思想大系」所収)の寛保二(1742)年八月の条に京・大阪・江戸三都の名物が論及され、その中で「(大阪の名物)橋と船、御城、白人、茶屋揚屋、天王寺蕪、石屋、植木屋」とあり、石屋や植木屋の繁昌が目立っていたことが窺える。もっともこれは江戸人の記述であり、又これは後日(1801・2年)の抄

集であるから直ちに断定は躊躇せざるを得ないが、京町奉行与力神沢杜口編『翁草(1722)』(「日本随筆大成」所収)に「(接木太夫)撰津山本村に接樹の妙を得たる者あり。豊太閤聞き伝へて伏見に召しよせ庭前の樹木を接しむるに悉く生長して奇花佳実を生じたり。(中略)今猶その子孫山本に多く接木をよくし植木屋数軒有りて花村を所々に出す也」とあり、この中の植木屋の呼称の如きは正に初期のものと云えよう。この接木太夫については故白井光太郎博士稿(『明治園芸史(大四)』所収)の中にも「(撰陽群談, 1701)に細郷谷の樹, 同郡木部河原東山等の山里に造り大阪天満の植木屋に送る。此處の人樹を撓接するの術を得たり。山本の植木, 同所より大阪天満の市店に荷出づ。当所の土俗木を撓接するの術を得て樹接太夫と称する家あり。加茂の植木, 同郡加茂村に造り市店に荷出て之を商ふ凡て此辺の山家樹を植養する事を宜しくす」などあり, 上記の接木太夫と相通ずるものがあり且つ植木屋の呼称も見られる。これらを勘案すれば1700年代には関西方面にも植木屋という呼称も定着していたとすることも可能となる。降って造園書離島軒秋里著『石組園生八重垣伝(1827)』に「(図解)樹老園の庭中に此の図石組, 浪華樹老園は大阪高津の植木や吉輔と云う長者也」とあり植木屋も相当の豪商の居たことが窺える。このほか京の柳原紀光(1800没)の随筆『閑窓自語』(「日本随筆大成」所収)に「(土御門院内小御所庭作之事)土御門里内小御所御庭は宝永火事後, 医師素仙といふものなどつくりしと聞ゆ。たしかならざればかさねてたづねべし。ことし, 寛政九(1797)年又池を広め橋をそへられぬとぞ。これは植木を商ふものの立ちよりてつくれるなり, 云々」と見え, 植木商人が庭作りまで関与しているのであり当時の世相の一端が窺われる。又当時の庭作りもすぐれた假山石組の如き手法は低下し造園材料重視一遍倒って石屋や植木屋が重宝がられ活用されてゆくと見ることも可能である。当時の世相にちがいない。

なお, 黒川道祐著『雍州府志』(1684)を見るとその中に「諸木並花草。北野種樹の家。諸品の樹木高低大小好みに応じて之を賣る。(中略)近世草花上中下三段に分ち百種を限りて価の貴賤に応じて而して之を賣る。北野の外所々に是れ有, 云々」と見え, 北野が植木屋(即ち種樹家)の拠点であったことが判る。又その頃の随筆『正月揃(1688)』にも「北野の作り木, 早咲の梅・桜・松」とか「嵯峨の相丸太・庭石」とか「鳴滝の飛石」などその職域が明示されていて北野の存在も明白である。併せて石屋の如きも茶庭や茶庭化した庶民の坪庭(坪之内)にふさわしい庭石の需要が求められ定着して居たものと思われる。上記の『雍州府志』の中にもそのことを窺い得る記述も見られるし, 『人倫訓蒙図彙(1690)』(「古事類苑」所収)の中にも庭石やが京の万寿寺通烏丸の西や

大阪の横堀にあったことが記述されている。又茶庭と関連して『松屋日記(1647頃)』に「遠州公伏見六地藏の屋敷にて長き水鉢をすへて古織へ茶湯御出し候へば殊の外織部殿御気に入り其の座より宇治へ石屋を呼びに被遣, 云々」とか, 茶書『江峯夏書』(1663)にも「報恩寺町に石や久圓と申す飛石うり申者在之候, 云々」と見える如く石屋業も植木業と共存していることも判る。更に最近の当造園学会春季研究発表会(昭55)における宮前保子稿「京都における庭師の成立と展開」の中に「明和五(1768)年頃に(惣樹木屋中定)という規定があり植木屋仲間の同業組合組織があった」と報告されており, 正しく関西方面にも植木屋と殆んど同語の樹木屋という呼称のあったことが証明される。もともと樹(ウエキ)と呼ぶ慣例も考えられるから, 全く同文と見て差しつかえないとも思はれる。

(3) 隣國中國の場合との関連

もともと植木に対して種樹という用語もしばしば散見することは本稿の冒頭でも言及した通りで中國の古書『史記』の中にも出てくる。そして同じ内容が和書『作庭記』の中に「秦始皇が書を焼き儒をうづみし時種樹の書おぼ除くべしと, 勅下したりしとか, 云々」とあり, 種樹という用語が何れも古くから定着していたものと思はれる。故塩谷温編『新字鑑』(昭14)によれば「種樹: 草木をうることを業とする人植木師」とあり, 「柳宗玄(元)文題種樹郭橐駝」ともある。正に植木屋の中國代表は郭橐駝といえる。このことはわが國の植木屋伊兵衛の『花壇地錦抄』(1695)の序の中の「自然に橐駝が伝に通ぜしや」とか貝原益軒の『花譜』(1698)の中の「柳子厚郭橐駝が伝に曰く, 云々」などの記述によってわが國にも周知のことであつたにちがいない。この橐駝伝は『唐宋八家文』の中に登載された柳宗元子厚(773-819)の詩文の一つであり, 題して「種樹郭橐駝伝」という。種樹の用語のほかに後段に植木の用語も見られる。試みに最近の朝日新聞社文庫本吉川幸次郎監修『中國古典選36: 唐宋八家文』(昭53)に基いてそれを解讀すると次の通りである。「郭橐駝。不知始何名。病癘。隆然伏行。有類橐駝者。故郷人號之駝。駝聞之日。甚善。名我固当。因捨有名。亦自謂橐駝云。其郷日豊樂郡。在長安西。駝業種樹。凡長安豪富人。為(造)觀游(遊觀之地即庭園)及賣果者。皆爭迎取養視(顧問)。駝所種樹, 或移徒, (植)。無不活且碩(繁)茂。(中略)有問之。對(答)曰。橐駝非能使木寿(久)且孳(茂)。能順(從)木之天, 以致其性焉爾(耳)。凡植木之性。其本欲舒(伸)。其培(ツチカフ)欲平。其土欲故(古)。其築欲密。既然已(耳)。勿動勿慮。去不復(フタタビ)顧。其蒔也若(如)子。其置也若(如)棄。則其天者全, 而其性得矣(也)。故吾不害其(生)長而已。(中略)雖日愛之。

其實雖（敵）之。故不我若（シカザル）也。吾又何能（ヨク）為哉（ナサンヤ）。問者曰、以子（貴君）之道、移之官理（政治）、可乎。駝曰。我知種樹而已。理（政治）非吾業也（以下省略）

即ちこの伝記は植木の達人郭橐駝の信条を引き合いにして役人達への訓戒としたものと考えられるが、植木業の真髓がその中に十分加味されていることは確実といえる。なお、『唐宋八家文』は倉石武四郎著『中國文学史』（中央公論社本、昭31）によれば1601年に「唐宋八大家文鈔」が、又1730年に「唐宋八大家讀本」が刊行されているという。伊兵衛や益軒の橐駝の智識の取得はその中間の頃のもので見上げた新智識導入の一つと云えよう。

又、江戸末期の書『嬉遊笑覽（居処之部）』は『洛陽名園記』（北宋）を引用して「苗師が園を第一とす。大樹百尺むかひ峙て山の如く竹百余竿あり、水流には十石の舟をうかぶべし。大松七ツあり水これを環れり。是にて其の勝概を知らる。天然の趣は鉅麗を闔はすにあらざ、云々」とか「宋の代は風水堪輿の説行はれたる時なれば入宋の沙門等伝へたる事多からむ。宋の徽宗登極の始め方土が堪輿の説に随ひ京城東北の隅を高く築かしめしを、後その工役を興し山を高うして寿山良獄と名づけ梁師成というものにその事を董（タダ）さしめ、また朱勳（ベン）という者ありて濶（セツ）といふ処の珍らしき花木竹石を取りて進めらす。これを花石綱という。明人の『呉風録』に朱勳子孫居虎丘之麓、尚以種芸置山為業。遊於王侯之門、俗呼花園子。其貧者歲時担花鬻於呉城」とあり中國には種芸置山業とか花園子とかという庭師・植木屋の呼び方が郭橐駝師のほかにも使われていたことが窺える。しかし中國で植木屋（屋）の如き呼称は見当たらない。

ところで、前島康彦著『木録』（昭58）には樹芸家・花園樹斎・芸花戸・樹仙・樹鬻など様々な呼称があるが、それらがいつ頃から使われ出したかの源流を探究することは容易でない。なお、植木屋時代の到来によって様様の造園新用語が生れていることは宛も茶庭手法の成立によって新用語が生れたと同様で例えば植込・作り木・刈込・生垣・透し作り・ずんど切り・根の鉢巻・接木取木・盆栽・植溜などはその一示例といえる。当時の大衆性の最も高い俳諧などにもその一端が窺はれる。即ち『芭蕉句集』に（作り木の庭をいさめるしぐれ哉、捨てものに梨の接穂や山屋敷、門に入れば蘭に蘇鉄のにほひ哉、菊の花咲くや石屋の石の間、去年見たる花賣の来る彼岸哉）、又『武玉川』にも（行水廻す根府川石の上、植木屋に植えられている石灯籠、我が影をろくに覚えぬ植木賣、枳殻の味方に厚き垣根哉、生垣にふきんの白き法事過ぎ）、又、一茶の句に（青嵐吹くやずらりと植木賣り）等はその一示例にちがいない。

3. 植木奉行・庭奉行等

以上庭作り職人、植木職人などが定着してくると勢ひそれらを統轄するものが必要となる筈である。即ち庭奉行・植木奉行の如きがそれに該当する。以下いささか究明して見る。

先づ兼好法師（1352没）の『徒然草』の中に「庭の儀に奉行する人」の如き記述がある。即ち「（177段）鎌倉の中書王（中務卿宗尊親王御所）にて御（職）鞠ありけるに雨降りて後いまだ庭の乾かざりければいかげんと沙汰ありけるに（中略）吉田中納言（冬方）の――乾き砂子の用意やはなかりける――とのたまひたりし、はづかしかりき。（中略）庭の儀を奉行する人乾き砂子をまうくるは故実なりとぞ」とある。又『看聞御記』の永享二（1430）年の条にも「晴。南庭嶋形瀧頭石等河原者立之。珠藏主令奉行（河原者仙洞御庭物也）」とあり庭作り一般を取りしめる立場のものが奉行していたことが窺える。そのほか最も特徴的なものとして夢窓国師の『西芳遺訓（1345）』の中に、「本寺僧衆皆當有。其役。若憚。此役。不可求。掛塔也。浴主、山水奉行、穢土主塔皆宜随。其器量。主之、云々」とあり西芳寺にも山水奉行のあったことが窺える。

これについて柳田聖山京大教授はその著『夢窓國師語録』（昭58）の中で次のように解説している。即ち「夢窓の『西芳遺訓』のうちに山水奉行の規定がある。浴主、穢土寺塔主などと共にその任命について指示している。他の役職はすべて全員が交替でそれをうけもつべし。もしこれを憚るものは当初より入門を認めないという、きびしい立て前があるにかかわらずこれらの三つの役職だけはその器量に随って任ずるべし。その進退は期限を定めぬというのである。職務の内容にはふれていないがその名称から察すると山水奉行は庭師の管理が役目であり穢土寺塔主はおそらくは墓地の造營をうけもつ専門職である。とりわけ山水奉行は夢窓の西芳寺に特有の役職であり場合によるとその職務は西芳寺に限らず將軍家の内庭をはじめとして京の貴人の屋敷の庭師たちもその管理下にあったかも知れない。山水奉行は夢窓の直属であった。だいいち石を運び池を掘り土を盛り木を植えるのはとても一人や二人の力ではできない。衆人の気のあった協力が前提となる。当然出家ならぬ在俗の職人が大半となる。夢窓はかれらをすべて弟子として扱った。そんな弟子がかれの晩年にはかなりの数にのぼった筈だ、云々」と云うのである。これは一つの推測ではあるが更に検討してゆくと当時の植木屋・庭者の行動も自ずから知られる。ともかく、西芳寺に庭をとりしめる山水奉行職があったことは間違いない。

時代はそれから百余年後の『長興宿禰記』の文明八（1476）年九月十一日の条の「今日准后御参内庭作被。仰付。杉原伊賀守賢盛・隅山備中守貞隆祇候奉行」（「古事

類苑」所収)の如きも政府すじの庭奉行の存在を認め得るし、文明十年心も見ゆ(『言繼郷記』)。降って徳川初期の紀州侯徳川頼宣(1671没)の『内龍公言行録』(『古事類苑』所収)にも「(前略)頼宣君御機嫌にて庭の模様を作り替え候へとて公儀の御庭作山本道勾・鎌田庭雲を御呼び御庭之作直し有り御出来石燈籠を立てる日千宗在(1672没)病氣にて不出、千賀道味も指合ひ有りて不出、道勾庭雲石燈籠をみて火袋の日形月形の窓狭く当世に合ひ申さず候ひろげ候はば然る可しと有り(中略)頼宣君御出御覽成されしに火袋の窓を御覧に付け大きに御驚き(中略)奉行は何の役ぞ彼等が申すとて何人として此の方へ伺はず大事の古石燈籠疵付き候はも早用に立たぬ、云云」とあり、公儀の庭奉行の如きの存在することが窺える。正に徳川時代にはこの種の奉行体制も整っていると考えられることも可能であり、最近出版された『江戸時代役職事典』(東京美術選書27)の中で、「(前略)徳川幕府の作事奉行は幕府直轄の土木宮繕工事を行い江戸城の外廓や表向、門などの修理のほか寺社の造営修繕を行う職種となった。当初作事小奉行と称していたが寛永九(1632)年に定職となった。老中の支配下に属し役料二千百石で定員二名であった。なお寺社奉行、勘定奉行、町奉行の三奉行というのに対して土木建築修繕を掌る普請奉行小普請奉行作事奉行を総称して下三奉行といていた。配下に大工頭下奉行墨奉行植木奉行瓦奉行など多くの職があった」としている。そして別に「植木奉行：(詰)御台所廊下、(職)百俵(定員)四、(配下)同心十五、(支配)作事奉行」とある。このほか「浜御殿奉行・吹上花畑奉行・小石川茶園奉行・駒場薬園奉行」などの役職もあったことを明らかにしている。勿論定職にちがいない。

ところで、時代は遥かに遡って平安時代末期以降と思はれる造園の古書『作庭記』の異本とされる『山水抄』の中に「一向奉行」という耳なれない語彙がある。筆者も既に造園雑誌第47巻第4号(昭59)「作庭記新考」で触れた通り「右三巻、伏見修理大夫俊綱殊ニ此道ヲ好ミテ多年被見聞書レタル日記ヲ慶算見タリシカバ篇ヲ立テテ所ニ抄集レ也。要ニ可レ及レ他見、其日記云(中略)其時石ヲ立ル事予(俊綱)独一向奉行シ待リキ」とあり、これを上述の「徒然草」の庭奉行、『西芳遺訓』の山水奉行と対置させ、又一遍(智真)上人(1289没)の法語『播州問答集』の中に出てくる一向・一向称名・一向専念・一向念仏などの用語と重ね合わせて見ると、一

連の強い関連性を意識せざるを得ないことになる。このように庭奉行の存在が鎌倉・南北朝にかけて関連をもつことになると、その底辺にある植木職や庭作職人の存在さえも改めてスポットをあてて見ざるを得ないことになる。そして『山水抄』や『山水卉野形図』の如き手引書を必要とする時代環境さえ認めざるを得ないことになりかねない。例えば『更級日記』(1060)の「遣水作り」(六角堂)や田村剛博士が指摘されていた『仲資王記』(1204)の「石立僧」(仁和寺)の如きはその先例となる。なお、『吾妻鏡』延長二(1252)年八月七日の条には既に庭奉行のことも見えているのである。

4. 付 言

徳川時代はその鎖國政策によって中国との交流が全く閉ざされていた訳ではなく、寧ろ中国の典籍類が絶えず流入していたと見え、例えば既に引用した貝原益軒著『花譜』は植木師郭蒙駝の故事を紹介している他参考書として斎民要術・種樹書・農桑輯要・農政全書・種果疏・花史・牡丹譜・詩経・山海経・爾雅説文・月令・史記・瓶史・居家必用・博物志・文選・杜工部集・物類相感志・崔駰古今註・荆楚歲時記・西陽雜俎・本草綱目・養蠶勸余・柳々州集・時珍食物本草・閩書・事文類聚・鶴林玉露・朱子文集・救荒本草・三才図絵・月令広義・蠡海録・潜確類書・事林広記・天工開物・唐詩画譜・天中記・園史・名花譜・遵生八牋・墨莊漫録・古今医統・福州府志・養老寿親書・五雜俎・衡岳志・松江志・彙苑等夥しい文献をあげ、『花譜』の解説に充当している。この中で『農政全書』の如きはわが國の宮崎安貞著『農業全書』(1697)の母本であり、又陳扶揺著『秘伝花鏡』(1688)は益軒著『花譜』(1698)とはほぼ同時代のもので今日わが國內でも周知の名著であり、正に中国書が盛んに活用されていたことは驚くばかりである。

このような中国思想の氾濫のあらわれは本篇冒頭にも述べた『嬉遊笑覧』もその中(居処之部)で大いに活用しており、『園冶』を始め次のような中国書をあげている。即ち三余偶筆・蓴郷贅筆・西湖遊覧志余・入蜀記・池北偶談・洛陽名園記・資治通鑑・吳中故語・王安石集・吳風録・広寒殿記・西廂記・園亭記略・金鰲退食記・金石錄・雲卧紀談・考槃余事・白石黨方・博物要覧・娘容儀・五雜俎・簪簪雜記・八種画譜・広東新語・本草綱目・輟耕録等。(以上)

Summary : This essay is historical approach to 「UEKIYA」 or 「WEKI-BUGYO」 ages in Japanese gardening and sometimes connected with Chinese-side. That key-points are as follows (1) The name of 「WEKIYA」 appears in TOKUGAWA period (2) Garden material (tree or stone) is preferable to garden designing.